

# アジアと日本の農山村問題を相互啓発実践型地域研究で学ぶ

## 平成 27 年度活動報告

安藤和雄 (東南アジア研究所)・岩田明久 (大学院アジア・アフリカ地域研究研究科)・竹田晋也 (大学院アジア・アフリカ地域研究研究科)・坂本龍太 (白眉プロジェクト・東南アジア研究所) 矢嶋吉司 (東南アジア研究所)

### 1. はじめに：申請プログラム名とその目的

全体プログラムの構成：私たちは「アジアと日本の農山村問題を相互啓発実践型地域研究で学ぶ」という全体プログラムの傘下のもとに、個別プログラムとして(「まなびよし」プログラム 1～3 講義、「いきよし」プログラム 4 講義)として、以下の 4 つのプログラムを開講ないし準備中である。プログラム 1 京滋の地域の人々の活動に学ぶ「京滋の在地に学ぶ実践型地域研究」(H27、28 年開講 ポケットゼミ 前期月 3、単位 2、担当安藤和雄)、プログラム 2 世界の農業の諸問題を地域との関連で学ぶ プログラム 2「自然と文化ー農の営みを軸にー」(H27、28 年開講 全学共通科目 前期水 2、単位 2 担当竹田晋也)、プログラム 3 海外の農村にでかけて国際交流の中で京都の農村問題を考える「ブータンの農村に学ぶ発展のあり方」(H27、28 年開講 国際交流科目 前期集中 単位 2 安藤和雄・坂本龍太)を開講し、来年度にもこれらの 3 つの講義を開講し、加えて、プログラム 4『在地の参加型実践研究で学ぶ過疎・離農問題』(平成 27、28 年開講 ポケットゼミ)を本年度準備している。これらの講義を一つ一つのプログラムとして申請する。

全体プログラムの目的と活動概要：京都府、滋賀県下の農村地域においても、農業離れ、過疎化、高齢化、耕作放棄地の増加、林地の放置などは進み、その影響により、地域に根ざし農村で育まれてきた生活文化や生活技術(伝統芸能、食文化、棚田などの農耕技術、林野利用技術、灌漑水利施設の維持技術)が消滅の危機に瀕している。他方、農村伝統文化を基軸とした地域再生活動が各地域から個別におきつつある。こうした動きに応じて、都市文化の模倣ではない、新たな発想に基づく「伝統文化に基づく地域再生活動」を実践・支援し、大学教育における人材育成を盛り込んだ再生モデルとして一般化し、他の地域にも応用できるような仕組みをつくるのが、地域に根ざした大学としての火急の課題であると考え。このことを実現していく上で、既存のポケットゼミや全学共通科目、国際交流科目を平成 26 年度として開講、平成 27 年度からは「いきよし」の講義として集中講義により宿泊型で地元の人々から学ぶための参加型農村調査、参加型ワークショップ、集落機能や農耕地の維持のためのボランティア実践活動のアクション・リサーチ、資料作成などをそれぞれ開講した。2015 年度の特筆すべき事業は、2015 年 8 月 1 日に京都大学 COC 事業(地(知)の拠点整備事業)「COCOLO 域」と京都大学大学院教育学研究科 教育実践コラボレーション・センター E. FORUM が共催した「高校生と大学生の探究成果ポスター発表会」において国際的な視野を提供するために、プログラム 1 とプログラム 3 との関連で、京都府南丹市美山町佐々里集落で参加型農村調査を実施していた大学院アジアアフリカ地域研究研究科のスイスからの留学生、ブータンのシェラブッチェ大学の若手教師と研究員(学生)の 4 名のグループがその成果をポスター発表したことである。

## 2. 平成 27 年度活動実績

### プログラム 1 京滋の地域の人々の活動に学ぶ 「京滋の在地に学ぶ実践型地域研究」

- ① 本プログラムは、東南アジア研究所実践型地域研究推進室が地元と協働運営している亀岡、守山、朽木、南丹市美山町の農村部で、各 NPO、自治会、集落住民との協働で運営している京滋フィールドステーション事業及び他のプロジェクトとともに協働実施した。講師に 2014 年度と同様に各フィールドステーションの関係者を招へいした。京都学園大学教員大西信弘さん、鈴木玲治さん、NPO の平和もやいネットのメンバー藤井美穂さん、南丹市美山町知井振興会事務局長河野賢司さん、滋賀県守山市美崎自治会会長伊藤潔さんの特別講義を実施した。10 名の受講生のうち



美山町の杉が植林された水田を見学する自主参加の講義受講生

様に各フィールドステーションの関係者を招へいした。京都学園大学教員大西信弘さん、鈴木玲治さん、NPO の平和もやいネットのメンバー藤井美穂さん、南丹市美山町知井振興会事務局長河野賢司さん、滋賀県守山市美崎自治会会長伊藤潔さんの特別講義を実施した。10 名の受講生のうち

ち自主参加で土日を利用して、美山町知井の中間山地における地域再生と問題に関する参加型農村調査を 2 日間実施した。

- ② プログラム 3「ブータンの農村に学ぶ発展のあり方」の関連で、ブータンのシェラブツェ大学からの若手研究者を招へいし、プログラム京都府の中山間村のもっとも大きな課題となっている集落維持、放棄地の維持について日本の状況や合わせて日本の文化を学び、京大学生らとの交流、美山町集落などを見学し、国内でのスタディーツアーを実施した。
- ③ 国際会議開催を共催する予定であったが、日本側出席予定者の都合が合わず本年度は開催を中止した。
- ④ 京滋の中間山地をアジア視座に位置付けるために熱帯農業学会においてミャンマーの中山間地の農業の実態をまとめておくための報告を行った。

### プログラム 2 世界の農業の諸問題を地域との関連で学ぶ 「自然と文化—農の営みを軸に—」

- ① 京滋の農山村が抱える問題を学ぶためには国際的な視野にたつて世界の農林業に京滋の農業を



サラソウジュ Shorea robusta の開花

参加無料・申込み不要  
 (団体で参加の場合は事前にお問い合わせください)  
 お問い合わせ先 龍谷大学農学部 三浦 勲  
 E-mail: mitsuruf@rkyu.ac.jp

四月二十五日(土) 午後一時～五時  
 (十二時半開場)  
 京都市下京区七条大宮(京都駅から徒歩十分)  
 龍谷大学大宮キャンパス  
 南養(なんよう)第二〇三講義室  
 (部屋の変更の可能性がございますので、当日、講義室前の  
 掲示をご確認ください)

協力 龍谷大学現代インド研究センター

長田俊樹(総合地球環境学研究所名誉教授)  
 「ムンダ人の農耕文化とサラソウジュ・林文化」  
 八木浩司(山形大学)  
 「ネパールにおけるサル・パター生産地域の推移と消滅」  
 後藤敏文(国際仏教学大学院大学)  
 「インド古典文学・仏典に見るサラソウジュ」  
 コメンテーター 土屋和三(龍谷大学)・清水洋平(天谷大学)

## サラソウジュ 林文化の諸相

民族自然誌研究会第七十八回例会  
 共催地(知)の拠点整備事業(京都学教育プログラム)



サラソウジュの葉に盛りつけた繭乳食

位置づけることが必要である。国内外での多様なフィールドワークにもとづいて、地域の環境や文化の形成・維持に果たしてきた農林業の役割を明らかにするために、国内の研究会などを共同開催し、講師招へいを行った。

② 講義では世界の農林業と日本国内との比較の視点を取り入れているので、国内外でのフィールドワークにもとづいて、「農」の営みをもつ現代的な意義と意味を報告している。講義内容を充実させるために、国内各地域の農林業調査を実施し、参考資料を購入した。

③ 本プログラムの経費を利用して、本事業「アジアと日本の農山村問題を相互啓発実践型地域研究で学ぶ」を構成し相互関連している4つのプログラムの事務的運営支援を行うために非常勤職員を雇用した。

共同開催された研究会のポスター

### プログラム3 海外の農村にでかけて国際交流の中で京都の農村問題を考える「ブータンの農村に学ぶ発展のあり方」



ブータン王立大学シェラブッチェ校での校長・学生たちとの記念撮影

① 本プログラムは国際交流科目との協働で実施された。10名の京大生が8月29日から9月11日の間、ブータン王立大学シェラブッチェ校の受け入れでブータン国タシガン県の農村をスタディーツアーし、その引率を安藤が行った。

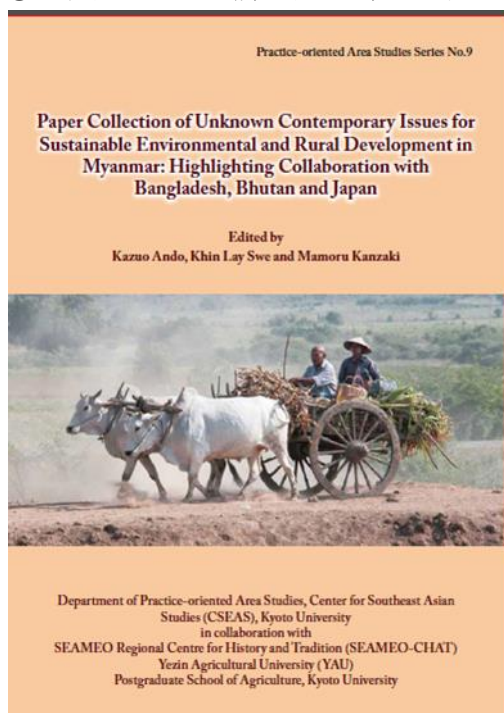
② 国内では、科研プロジェクト萌芽研究「新しい在地の

文化形成による現場型農村開発モデル研究」(安藤代表)などと協働し、ブータン王立大学シェラブッチェ校から講師と若手研究員を7月中旬から8月上旬と、1月下旬から2月上旬にそれぞれ4名と8名を受け入れ、参加型農村調査によるアクション・リサーチを約2週間ずつ実施した。すでに特筆したように、夏の受け入れ時には、京都大学大学院教育学研究科 教育実践コラボレーション・センター E.FORUM が共催した「高校生と大学生の探究成果ポスター発表会」でポスター発表している。冬には、2016年2月6日に東南アジア研究所実践型地域研究推進室が開催した国際ワークショップ「Environmental Problem and Its Possible Mitigation for Sustainable Development」において、本プログラムとの関連で招へいたシェラブッチェ校の若手研究者が発表している。

③ 本プログラムの経費を利用して、本事業「アジアと日本の農山村問題を相互啓発実践型地域研究で学ぶ」を構成し相互関連している4つのプログラムの事務的運営支援を行うために非常勤職員を雇用した。

## プログラム4 在地の参加型実践研究で学ぶ過疎・離農問題

① 東南アジア研究所実践型地域研究推進室は、地(知)の拠点事業において、過疎・離農の問題



シェラブッチェ校の若手研究者の発表が掲載された報告書

を共有するブータン王立大学シェラブッチェ校との国際交流を特色にして地域再生活動、大学教育における人材育成を、プログラム1~4を統合する「アジアと日本の農山村問題を相互啓発実践型地域研究で学ぶ」として実施している。プログラム4の主な内容は8月に参加型現場実習型講義「いきよし」として学部1年生5名が参加して南丹市美山町佐々里集落で知井振興会の協力を得て実施された。

② 国際交流科目(プログラム3)を補完し、全体プログラムの特色を生かすために、1~2月のブータンのシェラブッチェ大学の講師と若手研究者の招へい経費を科研プロジェクト萌芽研究「新しい在地の文化形成による現場型農村開発モデル研究」(安藤代表)などと協働分担して、京大生の過疎・離農の国際認識を高めるプログラム4の充実をはかった。とくに、本プログラムでは、京都大学学生やシェラブッチェ校の講師、学生たちが佐々里集落が約25年ぶりに復活させた「盆踊大会8月8日開催」の当日実施にボランティアとして参加し、地元の京都新聞

などでも取り上げられ注目された。



美山町知井地区佐々里集落 25 年ぶりの盆踊に参加する講義受講学生とシェラブッチェ大学の講師と若手研究者たち